

夜。

私はあてがわれた離れた離れの部屋で不意に目を覚ました。

下腹部に重くうずくまっている尿意を感じながら、私はまだ覚めきらぬ目でベッドの上から室内を見回す。

凝った彫刻が施された窓枠に囲まれた、大きな窓のカーテンの隙間から、濡れたような月光が部屋に差し込んでおり、その光が闇に馴れ切った私の目にはまぶしささえも感じさせる程であった。

私はベッドの横に置いた懐中時計を見る。

午前二時。

私は部屋に備付けの衣装戸棚から、私の為に洗いにし、整えたのであろうローブを取り寝間着の上から身にまとう。

初秋という時期の為、それほどの寒さを感じなかったが、この家の持つ雰囲気が私に寝間着姿で部屋を出ることをためらわせたのだ。

ドアを開け、廊下に出た途端、私の足元を何かが素早く通り過ぎた。

驚きに小さく息を吸込み、そしてそれが猫のエンプーサであることに気付く、この猫に驚かさされたのは二度目であった。

私の横、二歩辺りに立ち止まったエンプーサが私に振り返り、大きく虹彩の開いた目で見詰める。

目が月の光を反射し、鈍い光りを放つ。

何故か私は、その瞳から視線を外せなかった。

黒猫はふいに、その黒檀のような顔を歪め、小さな牙が並んだ口蓋から真つ赤な舌を覗かせる。

まるでそれは、笑いのように見えた。

そしてエンプーサは、現われた時と同様に、猫独特の唐突な無関心さを示し、その場を音もなく立ち去った。

身体が寒さを覚える。



母屋への渡廊下の端にある手洗で、小用を済ませた私の耳に、小さな声がとどいた。

辺りがこれほど寝静まった頃でなければ、到底聞えなかつただろうほどに、その声は小さく、私も、足を止め耳をそばだてて初めて、それが女性の声である事に気付いた程であった。

一旦、その声を意識すると、声が母屋の方向からのものである事に気付く。

私は母屋に向かって、その声に向かって、誘われたかのように歩きだす。

母屋へと通じるドアを開けると、一層その声ははつきりとしたものになった。

私はそれが雅美の声、しかも、すすり泣きと哀願の声が混ざったものである事に気付く。しかもその声には、女が男との交わりの際に上げる、喜びの調子が混ざり込んでいるようであった。

声は、昼間には案内されなかつた母屋の二階から聞えていた。

私は足音を忍ばせ、階段を昇る。

ますます明瞭になっていく雅美の声に、私は、彰子の叱咤するような調子の声が混ざっていることを知る。

胸の鼓動が、自分でも意識出来る程に昂まる。

階段を昇り切ると、そこは両側に二部屋づつ、計四部屋のドアが対面に並ぶ廊下であった。

奥の左側のドアが僅かに開き、そこから2人の女の声と、室内からの黄色がかつた明りが漏れだしている。

窓から差込む銀色の月光に満ちた廊下に、そのドアからの明りと、その明りによって生じる影が揺らぎ、二人の女の声とその影の動きに合わせて高まり、そして雅美のものらしいすすり泣きの声が響く。

私は自分でも意識しないうちに、その僅かに開いたドアに向かって歩を進め始めていた。

そして私は、ドアの隙間から室内の光景を見る。

部屋の電灯は消され、その代りに古風なランプが二つ灯されている。その、時折揺らぎを見せる明りの中に、雅美と彰子の姿があった。

彰子はドアに背を向けた格好で、凝った刺繍の入ったタオル地のバスローブを身に着け、昼間アップにしていた髪を下ろしている。その髪がランプの明りに鈍く光り、まだ湿っている事がわかる。

彼女の身に着けているバスローブは、腰のあたりで結んだ紐がゆるみ、半ば着崩れた胸の辺り

から裸の肌が覗いていた。それが桜色に色付いているのは、湯上りによる火照の為だけでは無かった。

そして彰子の正面には、床に跪いた格好の雅美がいた。

雅美は、昼のままの紺と白のメイドの服を着けており、異様な事に、背中に回された腕の両手首と肘の関節辺りを、赤い紐によって形が付くほどに強く縛られていた。

しかも身に着けたメイドの服は、ボタンを外された胸の部分が大きく広げられ、まだ小振りの二つの乳房が、無理矢理に露出させられている。そしてその柔らかな膨らみの上には、強く打たれた事によるものだろう、赤く色付いた所があった。

私はその奇異な光景に一瞬息をすることさえ忘れ、食入るようにその二人の女を見続ける。

「こつちを向いて……」

彰子が昼間そのままの優しい声を雅美にかける。

だが、この光景の中でのその声は、そうであることがいつそう、裏に潜む異常さを浮き彫りにしていた。

彰子の声に雅美が首を小さく振り、喉の奥から低い、泣き声の混ざった呟きを漏らす。

「お願です、もう許して……許して下さい」

雅美の哀願の声に、彰子の声が更に優しさを増す。

「こつちを向きなさい……雅美。私は二度言ったわよ……、一度目だけは許してあげるけど……二度目は……」

雅美がはつきりと嗚咽の声を上げ、膝でにじるようにして彰子に向き直る。

新しい涙が頬に流れ、表情が悲しみに歪む。

突然、向き直った雅美の乳房に、彰子が勢いをつけた平手を振り下ろす。部屋に小気味良い音が響き、雅美の胸にまた一つ赤い染みが加わった。

雅美が悲鳴を上げ、乳房を打たれる痛みには耐えながら身をよじる。

そんな彼女に向けて、彰子が更に二度、容赦のない平手を振り下ろす。

「ああっ！」

雅美が自分の身を守るかのように背中を丸め、床にうずくまった時、彰子の手が、そんな彼女の髪の毛を掴み、顔と身体を引き起こした後、反対の手で赤く腫れた乳房を鷲掴みにする。

彰子が、雅美の乳房を大きく歪めながら囁く。

「熱いわ、貴方のお乳……」

その声は奇妙に掠れており、彼女が内に秘めている昂ぶりを私に教えた。

彰子が雅美の髪を掴んでいた手を離し、抜けた髪の毛が数本まとわり付いたままの手で、もう片一方の雅美の乳房を掴む。

彰子は、雅美の胸の二つの膨らみを乱暴に捻り上げ、そして鉤状に曲げた指の爪を立てる。

雅美が、幼子がむずかるように激しく首を振り、か細い哀願の声を上げる。しかしその声は、先ほどの彰子の声と同様に、ある種の陰媚な淫らさを内包していた。

彰子が更に強く爪先を乳房に押付けながら薄く笑い、雅美に命ずる。

「舌をお出し」

雅美が命じられたままにおずおずと唇を割り、舌先を覗かせる。そしてためらいがちに上げた顔を彰子に向ける。

屈み込んだ彰子が、同じく唇から伸ばした舌で雅美の舌を絡め取りながら、両手で、彼女の乳房の頂点で起立しはじめている乳首を軽く摘まむ。

彰子と雅美の舌がお互いを刺激し合うように絡み合い、彰子の指が、ゆっくりと雅美の両方の乳首を愛撫する。

雅美の息遣いが荒くなり、彰子の指の間の乳首が固くなる。

絡まり合っていた二つの舌がほどけ、彰子が雅美の首筋に舌を這わせはじめる。

這い下りた舌は雅美の色づいた乳房を舐め、唇がその頂点で固く尖っている乳首をくわえ込む。

彰子の舌が微妙な動きを見せはじめると、雅美の息がまた一段と荒くなり、両方の乳首を指と舌で愛撫される快感に目が焦点をなくす。

私はそんな女達の淫らな行為と、雅美の浮かべる表情を見詰め、衝動が湧きあがるのを意識する。私の下腹部でその衝動が一つに集約され、硬化する。

「あっー！」

急に声を張り上げた雅美、身を後ろに逸らす。

彰子が唇を離れた雅美の乳房には、赤い歯形が刻印されていた。

傷ついた乳首と雅美の表情を満足気に見下ろし、彰子が淫らに微笑みながら、舌先で自分の唇を舐める。

「後ろをお向き」

その彰子の言葉に、今度は躊躇する事なく雅美が床の上を膝で這い、背中を向け、上半身を床に付く程に大きく倒す。両肩で体重を支えながら膝を立て、持上げた尻を彰子に向けて掲げて見せる。

彰子は、目の前の紺色のスカートに包まれた雅美の尻を撫で回し、はっきりとした性的な興奮をあらわに呟く。

「淫らなお尻、まだ男も知らない小娘のくせに、この肉付き具合はどう……、とつても嫌らしいわ……泣かしてあげるわいつものように、喜ばしてあげるわ、いつものように……」

彰子が雅美のスカートをまくり上げ、白い下穿きに包まれた尻をあらわにする。

私は、その尻の狭間に食い込んだ下穿きの部分が、奥に潜む肉の器官の形を浮き彫りにするほどに張り付いている事を見る。

それは又、彼女の興奮と快感の証でもあった。

彰子が、下穿きが張り付いた箇所を愛撫するように指を這わしはじめると、その都度、雅美の太股は少しずつ開き、腰が後ろに向かって突き出される。

彰子はその愛撫を続けながら、低く含み笑いを上げる。

「フフ……下着の上からでも手が汚れてしまうわ……」

雅美が低く、押え切れない快感の声を漏らし始めるが、それでもなお、執拗に彰子の愛撫は続く。

そして遂に、雅美が尻を指の動きに合わせるように上下しだしたとき、彰子は彼女の下穿きをずり下げ、脚から抜き取った。

私は、黄色っぽいランプの灯火に浮び上がる、雅美の尻の豊かな白い膨らみと、その肉の谷間に息衝く秘部を見る。

先程の彰子の言葉の通り、雅美のその飾り毛に囲まれた箇所は男を知らぬらしく固く閉じられ、粘膜質の部分はまだ、外側の厚い陰唇の奥に秘められたままであった。

着崩れたとはいえ、まだ上半身を着衣のままに、うつ伏せにした身体を極端に曲げて持ち上げた裸の尻をむき出しにする雅美の姿。

私は、その獣のように淫らな今の姿と、昼に初めて門の前で合った時の清楚な雅美の姿とを瞬間的に思い浮べる。

私の中で昂ぶりが急激に膨れ上り、腰に生じた強い衝動が出口を求めて激しく騒ぐ。

陰茎が下着を強く押し上げた。

彰子の手が、直接に雅美の秘部に触れ、中指をその狭間に沿わせるようにして撫で上げる。

指先が柔らかな肉襞を割り、その奥に潜り込んでいくと、雅美が軽く声を上げ、太股を震わせる。

彰子の指はゆつくりと雅美の秘部の溝に沿って動き、その奥から滲みだす愛液の短い糸を絡み付かせて抜き出る。

彰子は、雅美の愛液で濡れた中指を、秘部の上で固い窄まりをみせている彼女のもう一つの肉穴に這わせ、その表面で円を描くようにして刺激しはじめる。

後孔に受ける愛撫に、耐え切れない風情の声を雅美が上げる。そしてその与えられる快樂によって、秘部の狭間から愛液が白濁した濃い粒となって染みだす。

「淫らな娘だこと……こんなところを弄られてそんなに気持ちが良いのかしら？」

充分に雅美の快感を知っている彰子が、言葉で雅美をなじりながら、更に指で執拗にその箇所を撫で回す。

雅美の愛撫される箇所はゆつくりと、その窄まりをほぐし始め、ふつくらと形を変化させる。

「ほらほら柔らかくなつて来たわよ……貴方のこゝ」

彰子の指が、極浅くその内部に潜り込む。

雅美が声を上げ、尻を震わせる。彼女のその箇所はまるで、内部に取り込んだ指を逃がしたくないとでも言うように固く窄まり、彰子の指を締め付ける。

荒く重い息を吐き、淫らな尻の味わい感じる女の表情を浮べる雅美を見詰めながら、彰子の目が冷たく光る。

彰子が急に麻美の後孔から指を抜き、すぐ横にある机の抽斗を開ける。

彼女が、その中から取り出したものは一振りの黒い鞭だった。背中でのその雰囲気を感じ取った雅美が、これから自分が受けるであろう責めを思い、か細い泣き声を上げた。

そんな雅美に対して、彰子がわざと鞭を空中で一振りし、空気を裂くときの鋭い音を聞かせる。

「さあ、たつぷりと泣くのよ。貴方の淫らなお尻を鞭で真っ赤にお化粧してあげるわ」

その言葉が終わらぬうちに、興奮と嗜虐に昂ぶった彰子が鞭を振るった。

鋭い革製の鞭が、ランプの光を受けて空に軌跡を描き出し、まっすぐに雅美の尻房に向けて振り下ろされる。

部屋に、厚い肉を打つ時の甲高い鞭音が響き、その音に重なるように雅美の悲鳴が響く。

鞭を受けた白い尻に、細く赤い跡が刻みこまれ、雅美の唇の端から一筋の涎が零れ落ちた。

彰子は憑かれた者のように、何度も鞭を雅美の尻に振り下ろし続け、その度に鞭の犠牲となった尻には赤い線が引かれ、雅美が、もはやすすり泣きとは言えない程の声で泣き、哀願の言葉を吐き、身を悶えさせる。しかし、その秘部はますます快樂の証で濡れ、陰媚な光沢を増していく。

雅美が太股を大きく開き、尻房と、その狭間の二つの肉穴を後ろに向けて突き出す。

私は雅美の上げる声とその仕草とに、自分の奥底に潜むどす黒く、そして淫らな欲望を刺激される。

私の目は食入るように、その鮮烈で刺激的な光景を見続ける。

彰子が、鞭を振るう事によって乱れた息を吐きながら雅美に命ずる。

「もつと脚をお開き！ 私にお前の全てを、淫らな全てをお見せ！」

尻に鞭を受け続ける雅美が、その言葉に従って、脚を大きく開き始める。

限界にまで来た時、彼女は片一方の脚の膝を伸ばし、大きく開いた片膝付きの姿勢となった。

その極端までに股間をむき出しにする姿勢の為に、今や雅美の秘めた部分は、全てランプの明りの中に晒され、秘部の奥底を覆い隠していた陰唇さえもが開き、内部の濃い桜色をした部分の隅々までを克明に彰子と私の目に晒けだす。

開いた秘部から愛液が漏れ、太股が濡れ、そして光る。

彰子の手が、開ききった雅美の秘部に触れる。窄まった膣口とその周辺に指をじつくりと這わし、愛液を拭い取り、そして陰核に触れる。固く、持ち上がっているそれは、めくれあがった包皮の先端から僅かに内の瑤瑤色を覗かせ、指の腹で押し下げると、たやすく表皮が根元までずり下がる。

ランプの光を受け、まるで油を塗りたくったような光沢を放つ雅美のその箇所は、処女に相応しからぬ、性の快楽を知った女のものであった。

彰子がゆつくりと雅美の陰核と、その周りに指を這わし、淫らな快感を送り込む。

雅美はその指の動きとともに、快楽の息と睦言を発しながら、指の動きをねだるように腰を蠢かせる。

舌なめずりのような淫らな音が、雅美の秘部と彰子の指の間で生じ、別の一匹の動物のように膣穴がもだえ、切羽詰った女のあえぎ声が部屋に満ちる。

「お言い、どうして欲しいの？」

彰子が同性ならではの淫らな指使いのままに、雅美に問いかける。

雅美が首を小さく振り、耐え切れないような声ですすり泣く。

「お言い、言わなかったら決して上げないわよ……」

彰子は欲望に濁った微笑みを浮べ、愛撫の指の動きを止める。

雅美がひととき大きく声を上げ、彰子の指を求めて腰と秘部を振る。

彰子が雅美の尻に両手を掛け、二つの肉の半球を残酷なまでに、大きく左右に割り開く。既に開き切っている秘部が更にその奥をむき出しにされ、女の秘密の全てをさらけ出す。

溢れる愛液が2つに割れた肉襞の間で糸を引き、勃起した陰核がさらにその形を際立たせる。

雅美のまだ男を知らぬ膣穴の、内部の複雑な肉の造りが覗き、そしてその上の後孔までが、奥に隠した暗紅色を引き出される。

その肉体的な刺激と、秘めた部分をこれほどまでに外部に晒け出す事による精神的な恥辱が、遂に雅美に叫び声にも似た哀願の声を上げさせる。

「ああ、鞭で打って下さい、私のお尻を苛めて、私の淫らな所を苛めて、お願い、彰子様！」

その雅美の言葉を聞きながら、彰子は両手の親指で雅美の秘部の周辺の、肌が粘膜質に変り始める辺りを撫で回し、更に雅美の二つの箇所を押し開く。

「まだよ、雅美……、まだお預けよ」

彰子が、彼女の手によって開かれ、その内部の柔らかな筋肉層までを晒ける雅美の後孔に親指の腹で触れ、軽く触れる程度に指を動かす。

雅美がしゃくりあげるような、切れ切れの声を上げ、そして言う。

「ああ、そ、そこ、そこ、入れて、入れて、かき回して、ああ、お願い、もう変になってしまします……」

彰子が雅美の哀願に淫らな微笑を浮かべ、そして抽斗の中から、先を丸く溶かした直径2センチほどの硝子の棒を取り出す。

その棒を片手に持ち、もう一方の手で雅美の顎を掴み、彰子は硝子の棒を雅美の目の前に突き出す。

雅美が目前に差し出された硝子棒に舌を這わせ、表面を唾液で濡らし始める。

その時の彼女の表情は、これから自分に与えられるであろう快楽と、この乱れ、狂った行為に浸りきってしまった自分に対しての、どうしようもないほどの憐憫を感じさせるものであった。

彰子が、唾液で濡れた硝子棒の丸い先端を、押し開いた雅美の後孔に押し当てる。その冷たさを感じたのか、彼女のその部分の筋肉が、驚いたように窄まる。

「自分で入れてごらんなさい、中をかき回して上げるから」

彰子の言葉を聞くと雅美は自ら、その尻を突き出すようにして硝子棒を自分の腹の内部に収め始める。

尻の内部に侵入してくる硝子棒の冷たく固い感触と、肉の管が押し広げられる快感とに、恍惚とした表情を浮べた雅美の目の端から、一筋の涙が流れ落ち、頬を濡らす。

雅美が自らの動きによって、硝子棒の半分程を自分の内部に受け入れると、彰子がゆっくりと円を描くようにそれを動かし始める。

固く丸い硝子の先端が、雅美の肉管の内部を擦り上げ、引きつるような快感を生み出す。

硝子棒を咥えこんでいる雅美の後孔の周辺の肉が、内部のその動きによって盛上がり、そしてヒクヒクと蠢く。

腹の内部から快楽を引き出されながら、雅美の唇は切れ切れの声で快楽のあえぎを紡ぎだす。

時折その声が一瞬の間だけ甲高いものになるのは、彰子が操る硝子棒の先端が雅美の内部のある部分に触れ、強い尿意にも似た感触が腰と秘部に突き通る所為であった。

彰子が雅美の背中で拘束されている両手の紐を解く。

雅美が待ちかねたかのように、素早く自分の尻の中に挿入されている硝子棒の先端を、赤く紐の形が付いている手で掴み、己の内部を自分の手によって、擦り上げ、かき回し、上下に動かす。

そんな尻での自慰の行為を続ける雅美の表情は、淫らな快楽に憑かれた者のように、虚ろでそ



して激しいものであった。

彰子は再び鞭を取り上げ、その淫ら極まりない行為を続ける雅美の尻に向かって振り下ろす。先程以上の鋭い音が部屋に鳴響き、雅美の白い尻に再び赤い線が刻み込まれる。

彰子は何度も鞭を振り下ろし、その度に雅美は、鞭をもっと我が身に受けたいとでも言うように、熱く燃えるような尻を突出す。

「ああ！もつと、もつとぶつて、ぶつて下さい、私の淫らなところを引裂いてっ！」

その雅美の言葉に、彰子の振るう鞭が尻から逸れ、雅美の最も敏感で、赤く充血し、快樂の証を吐き続ける箇所を狙う。

鋭い鞭の先端が雅美の、開ききり、敏感な内部までを晒しだしている秘部に当り、濡れた音を響かせる。

雅美の口から断末魔にも似た悲鳴が上り、背中の筋肉がうねるように蠢き、一瞬背骨の形を浮び上がらせた。

雅美の全身に痙攣が走り、瞳がその焦点をなくす。

鞭を秘部に受けた事による苦痛と、自らの手で己の尻の内部を擦り上げる快感とが、彼女の全身を駆巡り、急激な気の昂まりが雅美を翻弄する。

そして次の瞬間、雅美の尻に差し込まれた硝子棒が、その内部の筋肉の動きによって激しく揺れ、その動きと呼応するように膣口が窄まり、愛液の白濁を吐き出す。

私はその雅美の二つの箇所の筋肉の動きと、その瞬間の彼女の表情とを目に収め、もどかしいような快感が腰を中心にして広がって行くのを自覚する。

下腹部でうずくまっていた衝動が急激に膨れ上り、限界を越える。

私は寝間着のスポンの上から、固く勃起した陰茎を掴み、握り締める。圧迫された剛直からもどかしげな快感が生じ、そしてその瞬間、尿道の中に熱い一本の線が突き通った。

私は押し殺したうめき声を上げ、激しい快樂とともに下穿きの中に、煮えたぎった衝動を吐出してしまった事を自覚する。

吐出す息と共に急激に醒めて行く快感と、腿の生暖かく濡れた不快感を感じながら、私は、雅美が、部屋の中で小さな息切れの音とすすり泣きが入交じった声を上げ、ぐったりと床に身を横たえる姿を見詰め続ける。

むき出しの尻と、その狭間のぬめりをそのままに、床に身を横たえる雅美の前に立った彰子が、自分のバスローブの紐に手を掛け、そして解く。

開かれたバスローブの狭間から彰子の裸体が覗き、ランプの光による強い陰影とともに浮び上

がる。

部屋の中に彰子のものであろう、薔薇の石鹸の香りが匂い、二人の女の身体から醸し出される雌の匂いとその香りと混ざりあう。

彰子が雅美に囁く。

「さあ、今度は私を……」

床から目を上げた雅美は、決してこの年齢の娘とは思えないような妖艶な微笑みを、彰子に向けた。

私は彰子がバスローブを脱ぎ捨てる時の音であろう、衣擦れの音と、雅美が床から身を起す時の音を聞きながら、立上がり、その陰惨な行為が行われ、そして行われようとしている部屋に背を向け、階段に向かって歩きだす。

その途中で私は、心の何処かで予想していた事に遭遇する。

黒猫のエンプーサが足音も立てない猫独特の歩みで、階段の方から私に向かって近づいて来たのだ。

私とエンプーサはすれ違いの時、お互いの目を覗きこみ、そして逆方向に歩み去る。

私には、虹彩が開ききり銀の円盤のようになったエンプーサの瞳が何故か、私を、そして人間をからかうような表情を浮かべているかのように見えた。

階段を降りる私の耳に、彰子の上げる快樂の声が聞え始める。

まだ夜は遅く、窓から眺める外の光景は銀色に輝き、濡れたような月光の彩りが褪せ始めるには、まだ暫しの時間が必要である。

以下、次回へ